

第 1725 回例会報告

令和4年2月3日(木)晴れ

会長挨拶

『新型コロナウイルスの終焉は 「終息」か「収束」か?』

会長 小口直久

「終息」とは? 完全に終わること

「収束」とは? ある一定の状態に落ち着くこと

「感染」とは、細菌やウイルスなどが、人や動物などの宿主(しゅくしゅ)に寄生し、体内で増殖することを指します。仮に感染しても宿主(しゅくしゅ)が無症状なら、そのまま平和に共存することもできますが、宿主(しゅくしゅ)の体調が悪化する場合、それは「感染症」ということとなります。

これまでも実に多くの感染症が人類の行く手を阻んできました。ペスト、コレラ、天然痘、結核、ハンセン病、マalaria、デング熱、エボラ出血熱、エイズなどなど。今日でも、麻疹、風疹、水ぼうそう、破傷風、インフルエンザ、マイコプラズマ肺炎などは私たちの身の回りに常にあり、こうしてみると世の中は「感染症」だらけであります。

歴史的なパンデミックとしては、13世紀のハンセン病、14世紀のペスト、17~18世紀の天然痘、19世紀のコレラと結核、20世紀に入ってからにはスペイン風邪やエイズなどがありました。ですが、このなかで人類が完全に撲滅できたのは、実に天然痘ただひとつであり、それ以外の感染症は、今もこの世界のどこかに存在し、忘れた頃に流行を繰り返しているということだそうす。

人類がさまざまな苦難を乗り越えて進化してきたのと同様、ウイルスや細菌もまた、自らの進化のために私たち生物を選び、あるときは壮絶な闘いをしかけ、あるときは共存関係を保つことで、共に長い歴史を歩んできました。人類の歴史はたかだか20万年、微生物の歴史は40億年にも及びます。彼らの生命力を打ち滅ぼす方法は、簡単には見つかりません。

そもそも人類の誕生にはウイルスの助けが欠かせないという事実があります。

細菌もそうです。ペストやコレラなど、細菌が引き起こす恐ろしい病もありますが、私たちの手や腸内、口腔(こうこう)内などには無数の常在(じょうざい)菌(きん)が棲息(せいそく)し、人体と平和に共存することで私たちの健康は維持されております。

つまり、ウイルスも細菌も、人類とは互いの進化を支え合う、切っても切れない不思議な共存関係でもあります。

ただ、ウイルスの脅威が数年後に弱まる可能性もあります。約100年前に世界を混乱に陥れた(おとし入れた)インフルエンザ、通称「スペイン風邪」は、1918年から約3年間続き、世界人口のおよそ18億人のうち約6億人が感染しました。日本でも「国内感染者は2300万人を超え、死者の合計は38万6000人に達した」と記録されております。それほどまで人々を恐怖に突き落としたスペイン風邪も、流行開始から3年後の1921年には「うそのように去っていった」といいます。その後も10年ほどは目立たない程度に流行を繰り返してはいましたが、かつてのような脅威ではなくなったというのです。

このようにウイルスや細菌は、弱体化・無害化の道をたどることもあるそうです。

これは生物進化からも説明ができますが、病原体が宿主(しゅくしゅ)の動物に感染してから長い時間かけて共存すると、宿主(しゅくしゅ)に重大な病気を引き起こすことなく共存状態になります。病原性が強いままだと宿主(しゅくしゅ)を殺して共倒れになる危険性があり、平和共存は両者にとって有利だという解釈です。ウイルスにとってもっとも有利な寄生方法は、宿主(しゅくしゅ)を殺さず、いつまでも自己の複製をさせることだというのです。

今後も、ウイルスや細菌と私たち人類は、つかず離れずの距離を保ち共存していくことが余儀なくされるということでもあります。

過去のパンデミックはいずれも、人類の文明発展に伴い発生してきた経緯があります。グローバル化した世界では、人間を大量に素早く長距離運べることとなり、ウイルスや細菌も速やか(すみやか)に世界中を移動できるようになります。

いずれをとっても、人類にとって「都合のよい」環境は、



2021-2022 年度 諏訪湖ロータリー活動方針

「温故知新」

微生物にとっても「生存に有利な」環境であり、そのことを視野に入れて、私たちはこれからの地球環境、経済環境を見直していくべきなのではないでしょうか。

人類が今まで起きたパンデミックで完全に「終息」させたのは、天然痘のみで、後のパンデミックについては未だ未可決、「終息」には至っておりません。

今回の考察から、新型コロナの終焉はゼロコロナの「終息」でなく、ウィズコロナを伴った「収束」に近づいていくのではないのでしょうか。果たして現在の感染状況を踏まえ、いつ「収束」を迎え、我々はいつかつての生活を取り戻すことが出来るのでしょうか。一刻も早い「収束」を願うばかりです。



本日の出席者はZOOM22名、中継会場出席6名の28名でした

◇臨時総会◇

2022-2023年度国際奉仕委員長に就任予定だった西澤賢二会員がセブ工場の台風被害によりしばらく戻ってこられなくなりました。このため長崎政直会員が国際奉仕委員長に就任する件が全会一致で承認されました

◇幹事報告◇

【報告事項】

- 1.第35期事業報告書ができました、後日配送いたします。
- 2・米山奨学会とロータリー財団の確定申告用寄付金控除証明書が届きました。昨年の1月から3月の分も含まれております。郵送いたします。
- 3.今月のロータリーレートは115円です

【連絡事項】

ロータリーの友よりロータリー手帳の注文募集が来ました。ご利用の方は事務局までご連絡ください

【受領文書】

平和構築と紛争予防月間」のリソース届きました。ご覧になりたい方は事務局までご連絡ください

第1725回例会

『障がい者支援の活動について』

NPO法人ふくろうSUWA 理事長 義経恵美子様

担当 職業奉仕委員会

NPO法人ふくろうSUWA 理事長 義経恵美子様から障がい者支援のお話をお聞きました

自身の子供が障害を抱えておりその子の将来を考えると大変な不安を感じたそうです。そして同じような境遇にいる子供がたくさんいるので、そうした子供たちが生きていけるような施設を作ろうとアパートを借りて活動を始めたとのこと

障がい者施設で働くことにより得ることのできる収入は大変少額で、その状況をいくらかでも改善できるよう農副連携を稼働させシイタケの栽培もおこなっているそうです

シイタケは農協で売っているそうですが自然相手ですので突然100kgもとれて販路に困ることがあるそうです。恒常的な販路の確保は難しいですが、こうした突発的な状況での販路確保はロータリーでも協力できると思います。ぜひ方策を考えてみましょう

ふくろうSUWAについて

ふくろうSUWAは、長野県茅野市で、障害者の日中支援を行う生活介護事業・障害者の就労の場としての障害者就労支援事業B型・居宅介護・訪問介護事業(身体介護・家事援助・移動支援・タイムケア等)・グループホーム・相談支援事業等の福祉施設を運営しております。

地元・茅野市を中心に、諏訪圏域6市町村にサービスを提供しています。

自分が重度心身障害者を養育していく中で、言葉は通じないが理解はしている、話せないと言っただけでも何となく分かっていなくとも思われがちな支援の中で、利用者の目線に沿った支援をしたいという思いと親亡き後も障害の重い人たちが、生まれ育った地域で自分らしく当たり前に暮らしていくために必要な福祉サービスとして下記の二つが最低限度必要と考えます。

農福連携へのきっかけ

農福連携への思い